



題材名：『仕事の達人』で、●個ずつのまとまりを作ったり、数量を比べたりして、身の回りの物を配ろう

授業者：播磨 久美子

学習指導要領の段階と内容

小学部3段階 A 数と計算

知・技 :ア(ア)④数を10のまとまりとして数えたり、10のまとまりと端数に分けて数えたり書き表したりすること。

思・判・表:ア(イ)⑦数のまとまりに着目し、数の数え方や数の大きさの比べ方、表し方について考え、学習や生活で生かすこと。

学び :数量の違いを理解し、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学習や生活に活用しようとする態度を養う。

題材目標

知・技

『仕事の達人』で物の数を数える時、10のまとまりで数えると正しく数えられることがわかり、教具を使って10のまとまりを作り、まとまりの数を数える

思・判・表

50までの物の数を数える時、正確に数える方法を考え、まとまりを作って数えることを判断し、10のまとまりを作り、まとまりの数を数えて総数を書く

学び

10のまとまりを作って数える活動に粘り強く最後まで活動に取り組む

授業づくりの手順

前題材までの到達状況から知識及び技能を列挙する

列挙した知識及び技能を段階化する

段階化した知識及び技能から指導内容の範囲を決定する

各児童(生徒)の指導内容(知・技)の習得のために内容を細分化する

細分化・段階化した知識及び技能の一覧を実態表の項目として、児童(生徒)の実態を把握する

知識及び技能の指導の計画を立てる

思考力・判断力・表現力等の指導の計画を立てる

教材の仕組みを決定する

学びに向かう力・人間性等を涵養するための計画を立てる

題材開始

R研で毎時間の授業の評価・改善

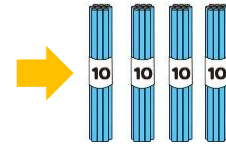
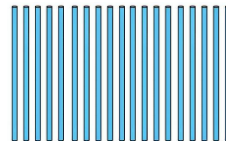
題材終了

観点別評価の実施

考察

【教材と仕組み】 『仕事の達人』…50までのスプーンやコップなどを、10のまとまりを作って数える活動(端数なし)

- ①教師が「いくつありますか、数えてください」と50までのスプーンやコップなどを提示する
- ②「10こ数えるくん」を使って10のまとまりを作る
- ③10のまとまりができたなら「10のまとまりくん」に入れる
- ④③を繰り返して、1～5つの10のまとまりを作る
- ⑤10のまとまりの数を数えて、総数をボードに書く



観点

評価

知・技

「10こ数えるくん」を使って10のまとまりを複数作り、正確に総数を数えることができるようになった

思・判・表

提示された50までの物を見て、「10こ数えるくん」を使って10のまとまりを複数作り、自分で作った10のまとまりの数を数えて、ものの総数を書くことができた(端数なし)

主体的な姿

自分から教具を使って数える姿や、活動に疲れた様子や集中が切れる様子が見られた際に、教師の言葉かけを聞いて最後まで活動に取り組む姿が見られた

数を視覚的に捉えるための教具の工夫



対象生徒Aさん
10までの数については、自分で数えて指文字で表したり、数字を書いたりして数を正しく伝えることができる。活動を繰り返すと数を間違えたり、活動に時間がかかったりすることが増える。



「10こ数えるくん」



「10のまとまりくん」

教具は操作のしやすさや持ち運びのしやすさを考えて作成しました。



『仕事の達人』で数を数える時、スプーンやフォーク、箸など細長い形状のものを立てて数えるために使用した。全体の数を視覚的に把握することができ、入れ忘れたところに気づきやすかった。

「10こ数えるくん」で数えたスプーンやフォークなどをいれる容器。10のまとまりで総数を数える際には、「10のまとまりはいくつありますか」の問いに、「10のまとまりくん」の数を数えて答えることができた。



具体物の総数を正しく数えるための場面設定の工夫



数えるものを取る→「10こ数えるくん」に入れる→「10のまとまりくん」に入れる の流れの中で、数のまとまりに着目できるように教具を右→左の動線に沿って配置した。まとまりの数を数える時には、数えるものと「10こ数えるくん」を移動して、「10のまとまりくん」のみに注目できるようにした。



「10のまとまりくん」を数える時、はじめは数えるケースのみを提示していましたが、題材の後半はケース横に余分を置いていても対象のケースのみを数えることができていました。



『仕事の達人』では、グループの生徒3名が10のまとまりを作って数えること、印に合わせて配ること、数と数の大小を比べることの課題にそれぞれ取り組んだ。

<成果>

OR研の時間を活用して、次時への授業改善(課題の方向性の確認や、認めの方やタイミング、課題提示の仕方などの修正)を行うことができた。

<課題>

●題材全体を通して、他の生徒との活動のつながりを意識することが難しかった。Aさんが数えたものを使ってBさんが…など、設定のつながりをもてるとよかった。題材開始前に設定を固めておく必要があった。

●実態把握を行う際に、前担当の話の聞いたり、生活の中でできるようになってほしい姿について話し合ったりしてから取り組んだが、「数学で身につけた力を生活の中で活用する姿」の想像が難しく感じるがあった。生徒自身が「正解した」だけでなく、「できるようになってよかった」と実感できるように、生活に必要な力を具体化する必要があると感じた。

生活に役立つ数学の力って、どんな力だろう…?

